



〔海の状況(9/21~10/20)〕

神子表面水温………気候の変動による影響がみられるものの、平年並み(平年より±0.5℃)からかなり高め(平年より1~1.5℃高め)で推移した。

米ノ表面水温………期間の全体をとおして、平年並みからやや高め(平年より0.5~1℃高め)で推移した。

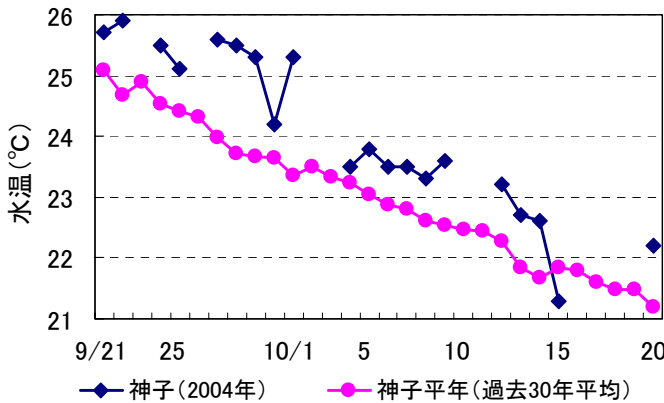


図1 三方町神子地先における表面水温の推移

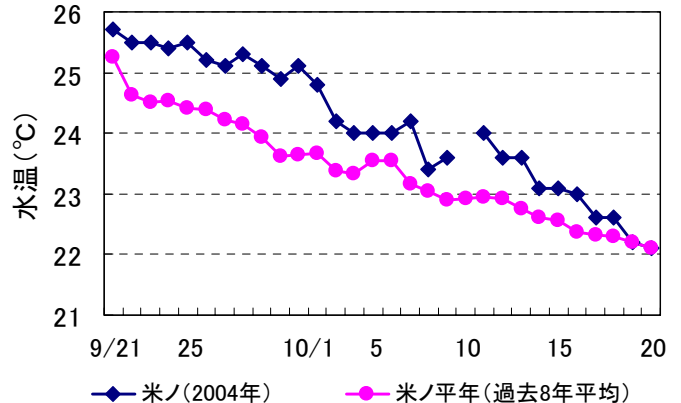


図2 越前町米ノ地先における表面水温の推移

100m深水温………若狭湾沿岸域から沖合にかけて、16~18℃台の水域が広がっていた。

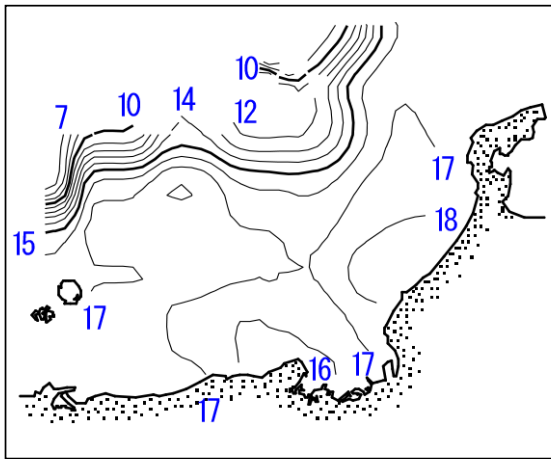


図3 2004年10月上旬の100m深水温

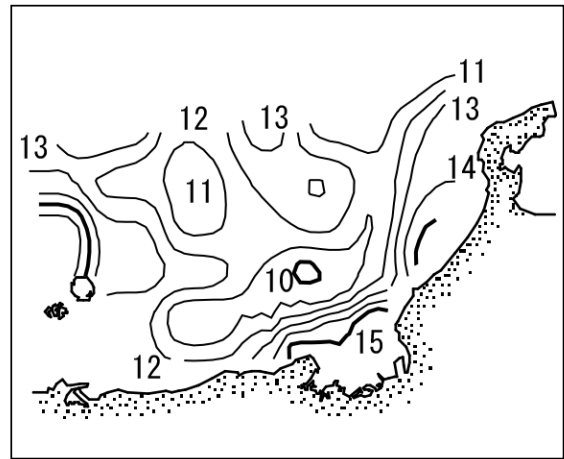


図4 2003年10月上旬の100m深水温

平成16年度第2回日本海海況予報

日本海区水産研究所が、2004年10月から12月までの日本海海況予報を発表しましたので、関係部分を紹介いたします。

- 丹後半島沖にある暖水域は、北東に移動した後、能登半島沖の暖水塊の一部となるでしょう。
- 山陰・若狭沖冷水域の規模は小さく、離岸していた。今後の張り出しも弱いまま経過するでしょう。
- 対馬暖流の表面水温は、6月以降やや高め~かなり高めで推移してきたが、今後は平年並みに経過するでしょう。
- 対馬暖流の50m深水温は、6月以降の日本海西部でかなり高めで推移してきたが、今後はやや高めで経過するでしょう。

(松宮由太佳)

## 〔漁の模様〕

2004年9月の県内の総水揚量は994tで、2003年同月を29t下回った。アジ類（2004年103t、2003年57t）、マグロ類（15t、1t）、トビウオ（43t、1t）、シイラ（48t、27t）、サワラ（214t、113t）、アカガレイ（54t、37t）、フグ類（12t、1t）、キス類（43t、9t）、アカエビ（54t、42t）等は上回ったものの、カタクチイワシ（0t、62t）、サバ類（2t、48t）、ブリ類（119t、234t）、その他カレイ（89t、107t）、ケンサキイカ（4t、41t）、ソデイカ（8t、32t）等は下回った。

## 漁業種類別の状況

定置網 …… アジ類、マグロ類、シイラ、サワラ、フグ類等は上回ったものの、カタクチイワシ、サバ類、ブリ類、ケンサキイカが下回り、全体で32t下回った。

底びき網 …… その他カレイ等は下回ったものの、アカガレイ、ニギス、アカエビ等が上回り、全体で53t上回った。

釣り・他 …… キダイ、アマダイ等は上回ったものの、ケンサキイカ、ソデイカ、タコ類が下回り、全体で50t下回った。

## 〔県内主要漁業の9月の漁獲量〕

（調査対象市場：三国・越廼・敦賀・早瀬・小浜の各漁連支所、福井市・越前町・若狭高浜の各漁協）

（単位：kg）

定置網				底びき網（つづき）			
魚種	2004年	2003年	94-03平均	魚種	2004年	2003年	94-03平均
カタクチイワシ	0	61,728	55,264	タコ類	1,594	1,913	3,648
アジ類	101,765	55,870	93,333	アカエビ	54,037	41,564	48,032
サバ類	1,789	48,129	40,979	その他エビ	5,704	6,887	9,165
マグロ類	14,688	816	3,530	その他	74,750	74,156	78,065
カジキ類	4,687	16,237	14,008	合計	349,408	296,409	310,795
カツオ類	5,697	792	19,814	釣り, 延縄, さし網, その他			
ブリ類	118,304	233,078	176,088	魚種	2004年	2003年	94-03平均
ヒラマサ	9,429	12,343	9,846	アジ類	269	1,044	1,054
シイラ	47,735	27,258	78,375	ブリ類	1,031	454	1,038
サワラ	214,443	112,423	50,471	ヒラマサ	95	2,330	456
カマス	9,278	1,992	26,120	アマダイ	5,618	4,631	4,957
フグ類	11,824	924	18,439	キダイ	7,950	4,419	3,232
アオリイカ	6,912	2,721	11,065	アマダイ	7,820	5,015	6,376
ケンサキイカ	264	12,664	3,555	その他カレイ	278	410	1,503
ソデイカ	396	4,746	6,739	カマス	264	8	118
その他	30,555	17,921	51,733	タチウオ	376	161	376
合計	577,767	609,643	659,359	アナゴ	238	507	588
底びき網				メバル類	5,172	4,758	2,820
魚種	2004年	2003年	94-03平均	アオリイカ	2,694	809	5,519
キダイ	17,042	11,885	10,701	ケンサキイカ	3,509	26,553	12,416
アカガレイ	53,929	36,750	76,457	ソデイカ	7,789	26,945	41,547
その他カレイ	88,493	106,277	56,400	タコ類	3,192	6,457	5,654
アナゴ	7,190	4,745	5,347	その他	20,226	31,711	171,345
ハタハタ	828	1,876	2,159	合計	66,522	116,211	258,999
ニギス	42,195	8,919	19,076	総計			
ヤリイカ	2,620	1,169	505	2004年	2003年	94-03平均	
コウイカ	1,026	268	1,241	993,697	1,022,263	1,336,087	

## 〔近府県の漁模様〕

9月下旬から10月中旬の漁獲状況…1日1隻またはお統あたり。京都府の定置網漁獲量は舞鶴漁港への1日あたりの水揚量。）

石川県 …… 定置網 …… アジ173kg、サワラ104 kg、コゾクラ75kg、アカカマス41kg

京都府 …… 定置網 …… マアジ43.1 t、サワラ12.0 t、ブリ4.5 t、マルアジ0.6 t

兵庫県 …… 定置網 …… アジ150kg、ツバス90kg、カワハギ17kg、アオリ10kg

鳥取県 …… まき網 …… マアジ12.1t、ブリ類6.2t、ウルメ7.8t、カタクチ4.2t

（松宮 由太佳）

## ～ 平成16年度ブリ漁況予測 ～

本県および日本海側各県のブリ類の漁獲状況から、県内の定置網における今年度後半（10月～翌年3月）のブリ類の漁獲量を予測しましたのでお知らせいたします。

### ・当歳魚（アオコ・ツバス、2004年生まれ）

今年の4～9月までの漁獲量は180tで、平年（1992～2003年平均、267t）を下回りました。アオコが漁獲され始めたのは、例年より早い6月中旬から6月下旬にかけてで、7月は平年並みの漁獲がありましたが、8月以降は平年をやや下回るレベルで推移しています。

今後の予測としては、4～9月の漁獲量と10月～翌年3月の漁獲量には相関関係が見られることから、**平年（341t）を下回る200t程度**の漁獲が見込まれるでしょう。

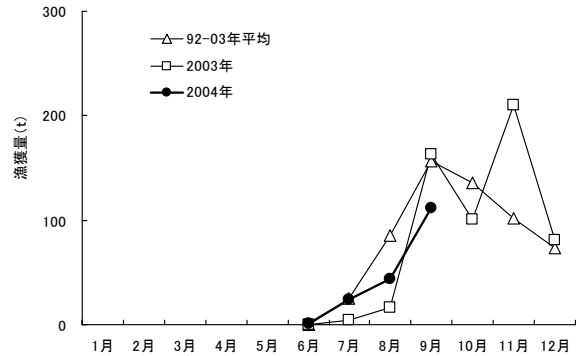


図1. 定置網における当歳魚の月別漁獲量

### ・1歳魚（ハマチ・ワラサ、2003年生まれ）

今年の4～9月までの漁獲量は1,971tで、平年（335t）を大きく上回り、過去10年で最高の漁獲量となりました。日本海で越冬する魚の多くが若狭湾に集中したことによると考えられます。8月中旬まではまとまった漁獲がありましたが、その後沖合へ移動したため9月以降は低調に推移しています。

今後の予測としては、2003年生まれの資源量は多くはないと考えられていること、日本海西部の水温がやや高めで推移するため魚が接岸する要因が少ないことから、**平年（109t）を下回り、最近3年間並みの50t程度**の漁獲が見込まれるでしょう。

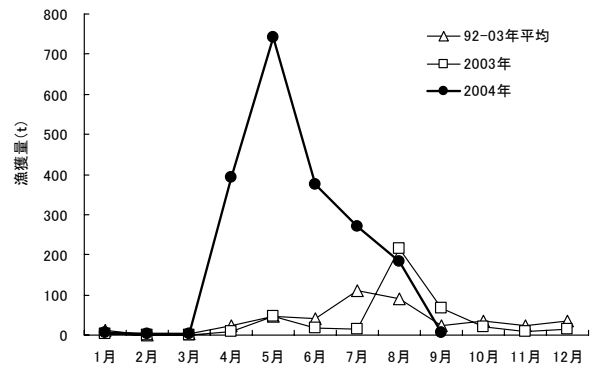


図2. 定置網における1歳魚の月別漁獲量

### ・2歳魚以上（ブリ、2002年以前生まれ）

今年の4～9月までの漁獲量は186tで、平年（205t）をやや下回りました。日本海における資源量は、2001年生まれ（3歳）は多い、2002年生まれ（2歳）は少ないと推定されています。一方、日本海北部の水温が平年よりも高めで推移すると予測されていることから、能登半島より南へ下るブリが少なくなると推測されます。

今後の予測としては、大型のブリの割合が多いと考えられるものの、**平年（37t）を下回る20t程度**の漁獲が見込まれるでしょう。

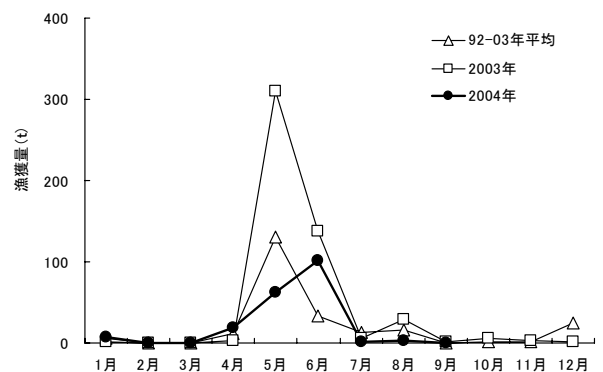


図3. 定置網における2歳魚以上の月別漁獲量

（河野 展久）

## より安全でおいしい養殖魚づくりの試み

福井県の若狭地方では、リアス式海岸の地形を生かしてトラフグをはじめとしたいろんな魚介類が養殖され、その数量も845トン（H14）に達し、本県の漁業生産額の9.2%（H14）を占めています。また、その品質は非常に高いと評価されていますが、そのキロ単価は外国からの輸入養殖魚の量に影響して低迷しています。

水産試験場では昨年まで、環境調和型養殖を目指した試験に取り組んできました。その結果、生け簀に入っている魚の総重量に対して腹八分目になるように餌の量を決めて投餌したり、一網当たりの養殖する魚の量を少なくすることによって、魚体に付く寄生虫の量を減らしたり、肝臓が極端に肥大するのを防ぐ効果のあることがわかり、より健康な養殖魚づくりの一つの方向を示すことが出来ました。しかし、養殖している魚が病気になったり、寄生虫が着いて弱っている場合、養殖に使用できる薬品が、魚種毎に決められ、その薬品数も制限されていることから、その対処方法はなかなか難しく、すぐに薬品に頼れないのが現状です。このような状況の中で、養殖業者の方々は日々の飼育方法の改善や環境の保全に努力を払っています。そこで、健康食材を餌に混ぜて与えることによって、病気に打ち勝つ元気な魚が出来ないか？、寄生虫が寄生していた場合には薬で駆除するのではなく、自然界の生物を利用することによって駆除できないか？という観点で、本年度から養殖試験を始めました。このような考え方は、農業では以前から取り組まれているものです。有機肥料を用いて土づくりから初めて、健康な作物を作る。農薬を使用せずに害虫を食べる益虫といわれる昆虫によって、害虫の被害を防ぐということです。

そこで実際には、人間でも活力が付くニンニクや梅などを餌に混ぜ込んでトラフグを飼育し、その後、人為的に寄生虫を付けてその活力を測定しようというものです。もう一つは、飼育している網に絡みついた寄生虫の卵を、カワハギやアイゴなど他の魚に食べさせようという試みです。事実、試験に供したカワハギやアイゴの胃の中に寄生虫の卵がたくさん入っていたことから、これらの魚が寄生虫の卵を食べることが確認されています。しかし、好んで寄生虫の卵を食べるのかどうか？。食べられた寄生虫の卵は、胃の中で消化されて死ぬのかどうか？。養殖されている魚を、カワハギやアイゴと同じ網の中で仲良く飼育できるかどうか？の問題点が挙げられます。これらは今後の飼育試験を行うことによって明らかにしていく予定です。

さて、もうすぐフグが美味しい季節になり、京阪神からの観光客が嶺南の各地において「若狭ふぐ」を食べるために来るのですが、このトラフグのおいしさは何からくるのでしょうか？。マグロのトロや寒ブリのように脂がのっているわけではないし、難問です。このことについても県立大学と共同で挑戦しています。歯触りや身の堅さ、身の色といった肉質を数値化しようという試みです。どの数値が一番おいしいのかが分かると、その数値を目標にして養殖することが可能となるからです。まだ、始まったばかりですが、その成果が期待されます。

（粕谷 芳夫）

